

平成26年度 いいたてホーム医務室事業報告書

1. 年間目標について

要介護度の重度化に伴い、必要とされる医療行為の充実を図り、終末期においても安心した施設生活が送れるよう、多職種間との連携・協働体制を深めていくについては、多職種間の理解と協力を得、共に「諦めない」ことを目標とし、様々な情報等を共有することで概ね達成できていると思われる。

介護職員の技術の質は高いことは言うまでもなく素晴らしいが、何より現場での連携と信頼関係についてはこの施設の財産であり誇りに思うレベルにあると思われる。

2. 業務計画について

1) 利用者及び職員の健康管理

健康管理について (入居者)	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 健康診断1回目 平成26年7月29日 平均年齢87.3歳 男性平均年齢 80.3 歳 女性平均年齢 89 歳。50 名受診（検診率 100%） 内、何らかの所見を有する利用者は 50 名。 ➤ 健康診断2回目 平成27年2月23日 平均年齢88.3歳 男性平均年齢82.6歳 女性平均年齢89.6歳。43名受診（検診率100%） 内、有所見者数42名 ➤ 要精密検査を指摘され、緊急を要するような検査結果は1ケースあった。後日精密検査目的にて受診している。 ➤ 感染症について、インフルエンザ及び食中毒の感染者ゼロであったこと。懸念された感染性胃腸炎に至っても罹患者なしであった。
職員の体調管理について	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 介護職員の平均年齢も高く、柔軟性と筋力の低下が目立ち、体調不良を訴える職員が目立っている。 ➤ 村外通勤を余儀なくされていること、かかりつけ医が固定しにくいことなどがストレスの要因になっている。 ➤ インフルエンザ罹患者は1名に留まった。 ➤ 腰痛対策については、予防法と介護技術の修得及び、福祉用具の購入（個人購入も含め）腰部にかかる負担軽減に努めた。
健康診断について (職員)	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 検診率100%（年2回） 施設外での健診を受けた職員については結果の写しを医務室管理とした。 ➤ 3人に一人は何らかの慢性疾患があり内服薬の処方を受けている。 ➤ 腰痛検査（年2回）については、“総合的に心配なしと判断”という結果が殆どであった。
健康教育について	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 職員会議定例会に於いて、時節に合った内容での勉強会を実施した。自身の体調管理については個別に相談を受けるなど、健康に関して常に健康を意識できるような体制作りにも努めた。 ➤ 『昼食後のストレッチ運動』については、身体の柔軟性とリラックス効果だけでなく、職員間のコミュニケーションをも図ることができた。良好な副産物をももたらす結果となり、次年度も継続し、その輪を拡げていきたい。
受診について	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 救急車搬送は4件、臨時受診と定期通院の割合は半々であった。 ➤ 介護と看護間で情報を共有することで、比較的速やかな対応ができた。（手遅れという状態は避けられた） ➤ 医療知識の周知・理解を図ることで疾患や事故の予防ができた。 ➤ 重症度の高いご利用者についても主治医の指示の下、家族への連絡を密にするなど信頼関係を築くことができた。

2) 感染症対策

<p>感染症対策委員会について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 医務室が中心となり、時節にあった感染症についての情報を周知し、感染症予防・蔓延に努めた。 ➤ ノロウイルスへの対策・対応としての勉強会を開催。発生時の対応キットを購入し各家に配置した。実際開封（予防のため）し、使用したケースは1回のみ。
<p>インフルエンザワクチン接種</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 入居者・職員に接種。 ➤ 入居者1名がインフルエンザ罹患者となったが、拡大することなく終息した。

3) 褥瘡対策

<p>皮膚トラブルの予防</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 看護サイドでは、早期発見の重要性を周知することと、皮膚トラブルがもたらす二次的疾患の特性について知識を広めることができた。 ➤ 皮膚の状態を健やかにするため、セラミド入り乳液である『キュレル』及び皮膚の状態に合わせベビーオイルまたはアズノール軟膏を個別購入し対応した。 ➤ 栄養の大事さ、経口摂取については適宜ケア会議などで話し合い、関心を深めていった。 ➤ 病院から褥瘡形成され退院となった方について、状態が一進一退しているケースが2例となり現在に至る。 ➤ 看護師間で検討し、保護剤や被覆材の選択についても慎重に取り扱うものとした。
------------------	--

4) 終末ケア

<p>看取りについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「慣れ親しんだホームで最期を」と希望する入居者や家族が多く、9名の方が施設の自分の居室で永眠されました。病院に移ってから亡くなった方は5名でした。 ➤ 最期は居室にソファーベッドを配置するなどして、家族に泊まっていただきました。一人で逝かせたくないという職員の思いからでもあります。そして、できるだけ悔いが残らないように配慮することで信頼関係を継続できた。 ➤ 終末期を考慮し、厨房・介護・看護の全スタッフで関わる事ができた。 ➤ 定期診療に加え、深夜早朝にもかかわらず来所していただき、最期の確認と家族への説明をしてくれた医師に感謝します。
----------------	--

【入院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
相馬公立病院	1	1											2
延日数	18	2											20
大町病院	3							1	1		1		6
延日数	36							6	11		4		57
あづま脳神経		2	1					1					4
延日数		19	7					14					40
小野田病院													
延日数													
川俣済生会												1	1
延日数												23	23
実人数 計	4	3	1					2	1		1	1	13
延日数 計	54	21	7					20	11		4	23	140

【通院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
相馬公立病院	5	3											8
小野田病院				1				1				1	3
大町病院	4	2	2	2	3	1	1	1	8	1	3		28
あづま脳神経				1	1	4	2	1		2	1	2	14
川俣済生会病院	1	3	2	1	1	1	3						12
大原総合病院													0
第一病院	2		1							1			4
布野歯科医院											1		1
つじ歯科医院				1									1
渡辺病院												1	1
福島日赤病院	3	1	1	1	2	2	1	1			1		13
実人数 計	15	9	6	7	7	8	7	4	8	4	6	4	85